新潮文庫

寄るべなき人々

壺井　栄著

新　潮　社

寄るべなき人々

定価は帯またはカバーに表示してあります。

新潮文庫 草102 B

昭和三十一年五月五日 発行
昭和四十四年十月三十日 十六刷改版

著者 壺井栄
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社 製本・憲専堂製本所
© Shigeji Tsuboi 1956 Printed in Japan

新潮文庫

寄るべなき人々

壺井　栄著

新潮社版

954

目次

初旅……七
花……三一
大根の葉……八七
三夜待ち……一三五
振袖と野良着……一五五
「はしり」の唄……一六三
大黒柱……一七九
寄るべなき人々……一九九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

廊下……二一九
表札……二五三
解説　窪川鶴次郎

寄るべなき人々

初

旅

ミネの初旅は十六歳の秋であった。今から三十年ほどの昔になる。瀬戸内海の小豆島から、四国本土の高松市へ渡る八里の船路がそれであった。祭見物だったと云えば聞えがよいが、そんなゆとりなど、よほどの思いで作り出さねばできないミネの一家にとっては、もっとも苦しい時代のことだったのを、ミネは年をとるにつれて深く感じる。ただでさえ貧しい樽職人の、しかもその職を失った子だくさんの重吉が、小さな船を片腕の、運送屋を始めたその小さな船に娘のミネをのせて、はるばる八里の船路を祭見物につれて行ったのだ。あだやおろそかには考えられないと、その初旅を思い出す毎にミネは考える。高松市へはその頃でも日に何回かの定期の汽船が通っていたし、秋祭とならば臨時の船も仕立てられたにちがいないが、そんなことには没交渉に父と娘は自家の小船に乗って出かけたのだ。しかも、まるで夜逃げでもするような真夜中の時刻に家を出た。重吉は米やそうめんや、着物など、高松にいる息子に届ける大きな信玄袋を肩にかけ、ミネは自分の着物の入った小さな風呂敷包みを抱えていた。まっくらな夜であった。

「気いつけてなミネ、船に酔うといかんさかいじっと寝とれい。兄やんに逢うたら、ちっと戻って来い云うとけ。……いや、云うな云うな。無理に戻らいでもえいわあ」

病気で寝っきりの母親のヤスは高松にいる息子の隼太へのことづけを云ったり取り消したりした。小学校の教師をしている隼太が、この頃何となく家をいやがっているのを病気のヤスは複雑

に感じ、時にはそれが愚痴になって涙をこぼしたりした。隼太は高松の師範学校を優秀な成績で卒業し、母校に勤務していたが、その優秀な成績に目をつけられて降るほどの縁談が持ちこまれ、そして片っ端から立消えていった。それが、家も畑も売り払ってしまった貧乏な両親や、弟妹の多い長男であることに原因しているのを知って、重吉もヤスも隼太の前に小さくなっていた。それをミネは子供心にほのかに感じていたのだが、ヤスの言葉でそのほのかさがまた少しはっきりさせられた。——何故教師になどなったか、何故樽屋のあとを継ぐ息子にならなかったか、私はそれを悔みます。教師には教師のみえがいります。樽屋のようにどんざ（ぼろをさした着物）を着てはいられません——

金を送れという手紙の返事に隼太はそんなことを書いてよこし、二十四円の給料の中から十円ずつ送る辛さを嘆いていた。それを両親に読んで聞かせるミネは、その文面の文字通りに隼太の辛さを察しることは出来たが、言葉以上のものを感じとるにはまだ幼なかった。どんざを着てはいられないと隼太は云う。本当にそうだとミネは思う。どんざを着た先生はおかしいと思う。やっぱり先生は洋服を着なくちゃなるまいと思う。ではどんざの代りに洋服を着ねばならない困難がどんなものなのか、そんなことは分らなかった。だから町で暮す隼太の存在はミネにとって一つの美しい夢の世界であった。高松へゆけばこれまで知らなかった何かが自分をまっている。その何かは隼太が伝えてくれる。隼太はきっと面白いところへつれて行ってくれ、珍らしいものを買ってくれるかも知れない。月々少女雑誌などを送ってくれる隼太のやさしさを、ミネは日本一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に考えていた。だからミネは、ヤスの気持の複雑な動きをよそにこの初旅がうれしかった。一カ月も前からミネはもう楽しみきっていた。妹の光江や弟の重雄でさえも修学旅行で高松は知っていたのに、きょうだい中でミネだけが今日まで島から外へ出たことがなかったのである。ミネにその機会がなかったわけではない。六年生の時にその修学旅行はあったのだが、破産して家財を売り払ったばかりの時であり、それでも足りなくて尚頭を下げねばならない人が村に三人ばかりいた、その三人の人たちへの気兼ねのために、ミネは修学旅行に出してもらえなかったのだ。その時の旅行費用は四十七銭であった。高松まで往復二十一銭の船賃は団体割引もあったろう。それに高松から琴平への汽車賃を合せて四十七銭の費用、それは五厘切手を貼りためたミネの貯金帳にもあった筈なのだが、父も母もミネの機嫌をとってあきらめさせてしまった。旅行の当日ミネは誰もいない教室にしょんぼりと腰かけていた。旅行にゆけなかった二人の同級生、その一人は風邪引きのツヤノという少女、も一人は骨軟化症のために上体を大げさに左右にふって歩く熊吉という少年であった。ツヤノも熊吉も休んでいた。級は六年と三年の複式教授であった。出入口に近い方の教室半分にぎっちり並んでいる三年生が、二列の机にたった一人ぽつんといるミネの方を不思議そうにながめる。ミネはむっちり黙りこくって午前の三時間を読本ばかり読んで過した。先生は午後を休みにしてくれた。

その時、父や母がどんな言葉であきらめさせたか、それをミネは今覚えてはいないが、三年生の中でひどく肩身のせまい思いをしたことが何かの折に思い出された。母親のヤスにとってもま

たそれがどれ程忘れがたいことであったかを、ミネはのちのち考えさせられた。光江や重雄が修学旅行の時にも、ヤスはそれを承諾する前に先ず光江たちに向って、

「ミネは行けなんだもん、お前らをやると依怙ひいきになるでないか」

それを聞くとミネは先になって母に反対した。しょんぼりと一人教室に残された記憶が生々しくよみがえり、妹や弟にはそんな思いをさせたくないと思った。

「やってやり、お母さん。卵で行けるがいの」

鶏は五羽いて、一個二銭三厘の卵は浜の料理屋がいつでも買ってくれた。子供たちはそれを貯めていたのである。

「そうじゃ、そうじゃ、お母さんがやってくれいでも卵で行くがい。そうじゃ、そうじゃ、うまい、うまい」

重雄が大きな声でおどり上った。光江や重雄はミネが旅行にゆけなかったことを少しも気にせず大騒ぎで出かけた。ミネもそれを大したことには感じなかったのだが、ヤスは重雄たちが出かけたあと、涙を流してミネにわびた。

「ミネがついあの時素直に聞き分けるもんで、可哀そうなことをした。それなのにお前は恨みも、ひがみもせずに、やさしいこと云うて、……」

その頃からミネは、まるで男の子のように荒い働きをさせられていた。重吉と一しょに船に乗って、重吉と一しょに荷役をする仕事だった。人里はなれた海辺へ山から伐り出した薪丸太を船

に積みこんで、近くの村々の醤油工場などへ運ぶのである。三尺の長さに切った丸太は五貫位から二十貫位のが多く、それを肩にかついで積みこんだ。重いのは重吉が、軽いのはミネが運んだ。うんと重い二十貫以上のは綱をかけて二人でになった。殆ど松の木ばかりで、そのやにのためにミネの手はいつも汚れていた。まるで泥をつかんだようにまっ黒いやにの手は、シャボンで洗ったぐらいでは落ちはせぬ。石油で洗って風呂にでも入らぬ限り手はいつも糊づけしたようにこわばっていた。その手はだんだん皮膚が厚くなり、指も太くなっていった。

「ほんにかわいやの、あったら年ごろのおなごの子を、針仕事も教えんと、こんな手にして」

ヤスは時々ミネの手をさすって嘆いた。病気でたおれるまではそれはヤスのしていた仕事である。だからヤスはその辛さを脊骨の隅々にまで味っていただけに、余計ミネが可哀そうでたまらなかったのだ。仕事は毎日つづくわけではなかった。月の中半分位だったが、積込みと荷上げと二日つづくと、十六歳のミネは髪の毛の先までも疲れ果てたようになり、三日目の朝に寝小便をもらしていることさえあった。恥じて顔をあからめるミネを、ヤスは小声でなぐさめた。

「だんない、だんない。洗うて干したらもとの通りじゃ」

こんな働きをする娘をいたわる意味でも、高松行は計画されたのである。だが人並に仕事を休み、切符を買って汽船に乗ってゆくのではない。高松送りの荷物を引受けたのを幸いにミネも一しょに行こうというまでのことだった。しかし今日のミネはいつものように手甲脚絆ではない。頭に手拭も被ってはおらぬ。両耳のわきから分けた前髪をふくらまし加減にして三ツ組にし、茶

色のリボンで飾っていた。リボンは貰いものであった。外国通いの船乗りの細君である小芳さんと呼ばれている女がくれたのだった。はでな赤いリボンより、じみな焦げ茶色のリボンの方がハイカラなのだと小芳さんに聞かされて、ミネは本当にそうだと思い、そのリボンを好きであった。そしてそのリボンのように小芳さんも好きであった。小芳さんはミネの家の隣りの門脇の六畳一間を借りてきれいに暮していた。少しくせのある毛をあまり大げさでない束髪に結って、いつもきちんと帯をしめていた。化粧が上手なのか、それとも生地なのか分らぬほど色が白く、少し藪にらみだった。それを気にしているらしく、話していてもすぐ眼を伏せるくせがあった。あのネと東京言葉を使ったが、仙台の生れだということで、舌が気になるような発音をした。ミネが高松へ祭見物にゆくのだと云うとミネのために帯を縫ってくれた。はじめミネが細かいもみじ模様のメリヤスの一ツ身をはぎ合せて半幅帯を作りかかっているのをみて、小芳さんは自分で買って出たのだった。

「十六にもなって半幅じゃおかしいわ」

その「おかしい」が「おかすい」と聞える小芳さんの顔を見上げてミネが困った顔をしていると、

「どれ、わたすにかすて。いいことすて縫ってきてあげるわ」

二時間もたったころ、黒繻子を狭く入れたお染帯を仕立てて持ってきてくれた。ミネは有頂天だった。着物の方は嫁入った姉のお下りで、そのまま肩と腰とにあげをした。黒無地に近いほど

目立たぬ横縞の紡績紬であった。それと帯とを風呂敷に包み、普段着で船に乗りこんだ。八里の船路を艪一本で押し切ろうという重吉を、ことによればその艪にとりついて、その艪を自分も押そうぐらいの気構えをミネはもっていたのである。しかし潮の流れにしたがって半ば流れてゆくために、潮時の夜中に船を出したのである。船路はミネの覚悟したほどの苦労はなさそうだった。それでも何となく胸がどきどきした。動いているのは父と子と二人きりである。とも綱をとき、碇をあげ、まっくらな海へ船はゆっくりと辷り出した。馴れない夜の海の上ではカンテラ一つが頼りに思えてミネはそのそばに坐っていた。いつものように重吉が何か用事を云いつけるかと待っていたが、何にも云わない。縞ネルのシャツの上に腰きりの胴着を着て帯をしめた重吉は、一しきり苫板の上を音立てて歩きながら帆を上げたり、帆綱をしめたりしていた。凪ぎと思えた海の上にだんだん風が出てきて、次第に船足は進んだ。艪も使わず舵一つで船は沖へ沖へと走ってゆく。重吉はミネと向いあって舵に片手をかけ、あぐらをくんで坐った。山裾に寝静まった村の三つ四つの灯も靄の中へ包まれてゆくように遠くへと消えてゆく。海ばかりがひろく、空ばかりが深い。生きて動いてのたうっている海と、ひろい空一ぱいの星。海で眺める空のひろさ、海で眺める海の動き、走り去る風に交ってしぶきを上げる潮の音がどこまでもつづく。香り高いその潮風に包まれてミネの着物はしっとりとなってきた。

「寒いじゃろ。中へ入って寝いや」

大声で云って重吉は、とんと煙管をはたいた。あんまり大声でミネはびっくりした。

「ん。まだねむとうない」

星を眺めていた眼を重吉に移すと、彼は今はたいた吸がらにからだごときせるをよせてゆき、すうっと音立てて吸いつけた。顔だけが仄かなあかりに照らし出されてすぐ消えた。つづけて掌にうけては吸っている。その度に重吉の顔が浮いたり消えたりする。眉尻の眉毛が人の好い証拠のように、つまんでのばしたほど突拍子もなく長い。立てつづけに五六ぷく吸って又云った。

「ねぶとう無うても寝い。風邪ひくといかん。それに白浜崎すぎたら、波が出るぞ」

「うん」

「酔うといかんぞ」

「うん」

ミネは返事だけした。寝る気はなかった。今ミネの坐っている艫の船底が寝場所になっていて、そこにはもう、ちゃんと蒲団も敷いてある。船霊をまつる神棚から、船頭一人の世帯道具が一式揃っている。水がめもでんと坐っていれば鍋釜七輪、それを置く棚から小さな水屋まで、職人の器用さで小まめに造作してあった。その二畳にも足りないいびつな船室の便利さの、まるでままごとのような構えを、ミネは非常な楽しさでいつも眺めていたのだが、今この真っくら闇の海の上を走りながら、一そう暗いであろう船室に一人降りてゆく気はしなかったのだ。ミネが今腰を下している四角な蓋、それをめくるとそこが船室への出入口になっていて、中へ入れば蓋は忽ち天井になる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com